

# 展示の本すべてにPOPをつけるそうですよ。

F「今回の展示、テーマはPOP。ということで、今までのPOPを広げてみました」

S「デザインが凝っていて、目に楽しいですね」

A「POPはF（フンボルトペンギン）さんが上手で、たくさん作ってくれましたね」

M「私の、私が文面を考えて、彼女にデザインしてもらってました♪」

F「たしか、利用者がカウンターで仰ったタイトルで検索してもヒットしなくて、よくよく聞いてみたらPOPのキャッチコピーだったということがあったとか…」

S「実際書くとなると、難しそうです。とくに、POPのポイントであるキャッチコピーを思いつくまでが一仕事、というか」

M「人の興味を引く書き方じゃないとね」

A「私は、印象に残ったセリフを引用したりしますね」

F「なるほど……。Sさんは、どの本でPOP書くのか、もう決めましたか？」

S「いや、まだ……」

A「村上春樹の作品で書きますか？」

S「え、YAに村上春樹っていいんですか？」

M「YAにも読める村上春樹って何がある？」

S「うーん……『海辺のカフカ』は男の子が主人公ですけど」

A「村上春樹以外にも好きな本があれば、それで書いてもいいですよ」

S「何でもいいんですか？ でも、これまでYA向けの本をあまり読んでいなかったの……」

M「YA向けと一口に言っても幅広いからねー。」

F「POPにはライトノベルのものも多いですね」

A「やっぱりYA世代の心をくすぐるものが多いんでしょうね。POPを書くために読んだものもありますよ。今、人気のものとか読んでみます？」

S「……頑張ります」

～後日談～

S「さっそくライトノベル選んでみました」

F「わ、はやいですね！ て、2巻？」

S「1巻は貸出中だったんですよー。とりあえず読んでみます」

M「SさんがどんなPOPを書いたのか、結果はYAの棚へ！」

←ブログやってるよ！ <http://sanda-city-lib-ya.sblo.jp/>



# ホンダラケ

2019.10.1

## POP★STEP★JUMP

M「……ダジャレ？」

F「掛け言葉と言ってください」

カモメに飛ぶことを教えた猫 ルイス・セプルベダ : 著 河野万里子 : 訳

白水社 1998年刊 963/セブ



瀕死のカモメから、生まれてくる自分の子ガモメに飛ぶことを教えてほしいと頼まれた黒猫ゾルバ。やがて生まれてきたカモメはフォルトゥナータと名付けられ、ゾルバの仲間たちの間ですくすくと育つ。だが、飛ぶことのない猫が空を飛ぶことを教えるというのは難問。ゾルバたちは頭を悩ませる。どのようにして彼らはカモメに飛ぶことを教えたのか。物語のラスト、ゾルバの「飛ぶことができるのは…」という一言が読み終わった後、響きます。

### ホンダラケとは

本誌は、読者の身も心も「本だらけ」にしてやろうという心意気から生まれた中高生向け小冊子です。本誌に登場する本は全て三田市立図書館本館のYA（ヤングアダルト）コーナーでご覧いただけます。

2か月に1度、年6回発行予定です。

ホンダラケは皆様の投稿をお待ちしております。YAコーナーに用紙・ポストがございますので、おすすめ本や本誌の感想・要望などお寄せ下さい。

# 青春読書記

～三田学園図書委員会より愛をこめて～

今回のテーマは「ジブリ」。  
ジブリ映画は何回見てもいいですね！

## 虫眼とアニ眼 養老孟司・宮崎駿著

2002年刊 徳間書店スタジオジブリ事業本部 778.7/02

本書は虫好きの解剖学者である養老孟司とアニメーション映画監督の宮崎駿の対談まとめである。ジブリ作品である『もののけ姫』・『千と千尋の神隠し』等を通し、自然と人間のこと、子供のことについて語り合っている。ジブリ作品に多く描かれる自然は、駿監督の子供たちに自然に触れてほしいという思いの表れなのだと感じさせてくれる一冊である。

P.N. まつりか (高校1年生)



# ホンドラケポストの投稿を紹介するコーナー ⑮

おすすめ本：『余命 10年』小坂流加 (P.N.Ryuna さん)

A「投稿ありがとうございました！この本はトライやるウィークで中学生の女の子がおすすめ本として紹介してくれたこともあります。難病を患い余命 10 年を宣告された主人公の物語です」

M「タイトルで想像つくけど悲恋ものだよな？『君の脾臓をたべたい』と  
いい、ヤングたちは好きだよな」

A「それはもう恋に恋するお年頃ですし。作者の方は実際に難病を患って亡くなられたそうで、お話がまるっきりフィクションとは思えない重みがありました。とはいえ、相手の男の子は茶道の家元のお坊ちゃまで、スポーツも万能でかっこいいので恋愛小説としても楽しめます♪」

M「それは妄想。そんな男は存在しない」

A「いやそこは小説ですから！突っ込まないで！」

M「えー。」

A「本が大好きという Ryuna さん、また投稿いただけると嬉しいです。お話の結末はみなさん、ぜひ読んで確かめてみてくださいね」



F コサ 2017年 文芸社

# 新着図書 Pick Up

『わたしがいどんだ戦い 1940年』キンバリー・ブルベーカー・ブラッドリー：著



大作道子：訳 2019年刊 評論社 933 プラ

舞台は第2次世界大戦中、1940年のイギリス。足の手術をして歩けるようになった少女エイダが実母から受けた虐待のトラウマに苦しみながらも、弟と後見人のスーザンや新しい友人たちとのきずなを深めていく。周囲の人々の愛情を受け入れ、少女が勇気をもって一步一步成長していく感動の物語。

2018年青少年読書感想文コンクール課題図書に選ばれた「わたしがいどんだ戦い 1939年」の完結編。

# YA世代のために血を吐く思いで名作を紹介するコーナー

『砂の女』安部公房：著 新潮社 1964年刊

水は泳ぐことができるが、砂は人間を閉じ込め、押し殺す……

この作品に初めて触れたのは、確か高校の教科書だったと記憶しています。昆虫採集を趣味にする男が、珍しい虫を求めてある砂丘にやってきたところ、砂穴の底の家に閉じ込められてしまう。男を家に留めおこうとする女や、脱走を監視する村人たちも不気味である。男はありとあらゆる方法で脱出を試みるが……。教科書には一部しか掲載されていないので、男はどうなったのだろうかと気になったものでした。緊迫したストーリー展開は読んでいておもしろく、文学とエンターテインメントがミックスされたような、古さを感じさせない作品です。



F アベ